

養育における統制実践認知

: 女子大学生の回顧報告を用いた探索的検討

内 海 緒 香*

Perception of Parental Control Practices: Exploratory Analysis Using Retrospective Reports of Female University Students

UTSUMI Shoka

abstract

The purpose of this study is to examine both the specificity and the developmental transition of parental controls in childhood, as well as to investigate the relationship between the pattern of demographic data and parental control practices. Thirty-one female university students (Median age 23.33) were interviewed regarding what kind of rules, recommendations and limitations were given during their childhood, along with their demographic data. The findings are; 1) Among specified categories of controls, safety/monitoring, conventional practices, academic motivational practices, general motivational practices, emphasis on gender/role, rules to media consumption and negative reaction to children's opposition were reported with high frequency. 2) A hierarchical cluster analysis for social demographic data indicated 4-groups solution, which varied by house ownership, maternal educational and career status, parental and grand-parental occupation. 3) Those whose both grandparents and parents are expert-managers perceived much more negative reactions from their parents towards their opposition compared with those whose parents only are expert-managers. Implications for both continuity and developmental transition in perceived parental controls and practices were discussed.

Keywords: parenting, control practice, monitoring, parental occupation, female university students

問 題

養育者は、子どもの幼少期に生存や健康の維持にとって必要な資源を提供するだけでなく、社会や文化の中で一人前のおとなに育つよう様々な働きかけを行うという、社会化エージェントとしての役割を果たしている (Maccoby, 1992)。社会化研究における養育¹ (parenting) とは、子どもに対する親の態度や行動、実践を意味している。養育の中でも、子どもがその社会で適応的に機能できることを目的として養育者が行う制御や監督、禁止、指示などは、統制 (control) と呼ばれている (Barber, 1997)。一般的に、統制は、応答性 (responsiveness) に対する要求性 (demandingness) の側面として、あるいはその組み合わせ (Baumrind, 1991; Maccoby & Martin, 1983) により説明されてきた。Darling & Steinberg (1993) は、このような類型を、養育者が作り出す情緒的側面と統制的側面が複雑に絡み合った家庭環境、すなわち養育スタイル (parenting style) と名付け、

キーワード：養育、統制実践、モニタリング、親の職業、女子大学生

*平成22年度生 人間発達科学専攻

特定の文脈や場面でみられる養育実践 (parenting practice) と区別した。これまで、養育スタイルという命名であったとしても意味内容が養育実践、あるいは養育実践と命名されていても内容が複数の側面を含んでいる研究がみられたことから両者の弁別は明確ではない (Kerr, Stattin, Biesecker, & Ferrer-Wreder, 2003) という主張もあるが、社会化の過程や文脈の影響を詳しく理解するにはこの2つの区別は必要と考えられる。本研究では、社会規範や価値の内面化、すなわち社会化に向けて子どもの行動を制御方向づける養育者の具体的な取り組みを統制実践 (control practice) と定義する。

養育行動と子どもの発達との関係にとって、文化や社会的環境といった生態学的文脈の影響は、欠かすことのできない要因である (Bronfenbrenner, 1979)。母親の統制的養育実践には国際的な文化差がみられる (東・柏木・Hess, 1981) と示唆されているが、一国の中においても文脈を越えて普遍的であろうか。Darling & Steinberg (1993) の文脈モデルでは、養育者の信念や価値観が養育についてのスタイルや具体的実践の先行因とされており、養育の機能はその文脈の影響を受ける。同じ文化の中でも養育者が有する価値体系が異なれば、子どもに対する養育者の制御的・監督的行動や態度に差異があるかもしれない。

こうした統制的養育スタイルに影響する文脈要因として、社会学や教育社会学では社会的階層差が取り上げられてきている。Bernstein (1971) は、学歴の低い労働者階層と高学歴な中産階層²の家庭における言語的統制の有り方の差異を、限定コードと精密コードという親子間のことばのやりとりの質的相違で説明した。統制したい事柄についての意味内容の明確な理解を目指すのではなく、「早く寝なさい」「どうして?」「親の言うことを聞いて素直に寝なさい」というような選択の自由を許さない、行動を直接制限する言語表出や集団内での暗黙の約束事を喚起するような発話は限定コードとして労働者層に多くみられ、その意味内容や考えを明確に詳しく相手にわかるように話そうとする、気分を盛り上げたりする工夫の伴った発話、たとえば、「明日早く起きなければ学校に遅刻するでしょう?それに大好きなマフィンだって食べる時間がなくなるわよね?」のようなより詳しい説明のついた発話や言語的やりとりは精密コードとして中産階層に多くみられたという。

近年、Lareau (2003) が、家庭、学校や買い物の場での親子のようすに対し泊まりこみを含めた参与観察を行い、親と子どもがどのように交流しているのか分析した。その結果、Lareau (2003) は、中産階層による協同的・計画的子育て (concerted cultivation) と労働階層による自然的・放任的子育て (accomplishment of natural growth) の2パターンを類型化し、中産階層の統制パターンは学校適応や自律性が求められる高度産業社会で有利に働くと主張している。日本では、統制に関する価値観の違いが多様化 (広田, 1999)、あるいは、日本社会での階層全体が多様化 (盛山, 2000) したともいわれていることから、特定の階層を対象にするよりも職業や学歴など下位のカテゴリーで分析することが適切と考えられる。

本研究では、幼いころから青年期後期に至るまで養育者から受けた社会化に関する働きかけを女子の大学生・大学院生から聴取しその内容を調べ、社会的地位に特徴的な統制実践はみられるか探索的に検討する。目的は以下の2つである。第1の目的は、どのような具体的統制実践がおこなわれ、またそれは子どもの発達や加齢に沿って認知され、対象となる事柄に質的あるいは量的な変化が見られるかどうかを検討することである。子ども期早期では、権威の流れは親から子どもへと一方向的、すなわち、親による統制の正統性を子どもが一方的に認め、逆らうことが無いという場合が多いが、青年期以降はその傾向が徐々に薄らいでいく (Youniss & Smollar, 1985) といわれており、小学校入学前と高校時代とで同じ分野への統制が一貫して行われているとは考えにくい。第2の目的は、出身家庭の職業や親の学歴などの人口統計学的データ、すなわち社会的地位に特徴的なパターンがみられるか検討するとともに、そのパターンと子どもが認知した統制の間に Bernstein (1971) や Lareau (2003) にみられたような特徴、たとえば、高学歴なホワイトカラー的職業出身者は計画的子育てや精密コードによる統制実践を受け、学歴の低いブルーカラー的職業家庭出身者は自然的放任的子育てや限定コードによる統制実践を受けるといった特徴が認められるか調べることである。

方 法

面接対象者

女子大学・大学院に在籍している女子学生31名 (年齢: Median = 23.33 Range 18.25-44.42歳) であった。

Table 1 人口統計学的データ (N = 31)

		%
出身地	大都市	22.6
	大都市以外	77.4
家族形態	核家族	67.7
	拡大家族	32.3
住居	持家	80.6
	持家以外	19.4
母親学歴	高卒以下	19.4
	短大以上	80.6
母親キャリア	常勤	54.8
	非常勤	45.2
母親公務員・教育 関係職業経験	有り	54.8
	無し	45.2

Table 2 父親と祖父母の職業区分 (%)

	専門管理	事務販売	自営業	農林水産	半非熟練	熟練
父親職業	71.0	6.5	19.4	—	3.2	—
父方実家職業	38.7	19.4	16.1	22.6	—	3.2
母方実家職業	25.8	48.4	16.1	3.2	6.5	—

調査期間と手続き：

教官の承諾を得て、調査の目的と概略が書かれた用紙を授業の際に学生に回覧してもらった。参加を希望した学生には個別に連絡を取り面接の日時を設定した。調査は2010年2月～7月、大学内の面接室で行われた。この調査には他の実験や質問紙調査も含まれていたが、本研究に関連する面接の所要時間は30分程度であった。面接の前に調査意図と内容を説明し、承諾書にサインしてもらった。終了後、対象者に謝礼の図書カードを渡した。

調査内容と分析方法

1. 人口統計学的質問：

中学時代の居住地、居住形態、家族構成、父母の職業・学歴や祖父母の職業、その他の統制変数として、これまでの習い事や家庭学習に関する質問を行い、中学時代の生活満足度を5件法（1. 全く満足していない～2. 非常に満足である）で尋ねた。

大都市（東京都または政令指定都市）以外の出身は8割弱、中学時代核家族で過ごした者は7割弱、住居が持家であった者は8割を占めた。短大卒以上の高学歴の母親は8割、母親のキャリアステータスは半数ほどが常勤の仕事についており、専業主婦は1割程度であった（Table 1）。

次に、白波瀬（2005）を参考にEGP階層6カテゴリー（Erikson, Goldthorpe, & Portocarero, 1982）(1)専門・管理、(2)事務・販売、(3)自営業、(4)農業、(5)熟練ブルーカラー、(6)半・非熟練ブルーカラーを用い、父親の職業、父方実家と母親実家の職業を分類した（Table 2）。父親の職業の7割は専門・管理、さらに、父親の4割が専門管理の世帯出身であった。母親の半数は教員、公務員経験者であり、そのうち2割強は専門・管理の世帯出身であった。これらの割合は、平成20年職業別就業者構成比における男性の専門技術と管理的職業の合計17.8%、女性の7.6%（平成21年 内閣府）に比べて非常に高い値である。

Table 3 各学齢期における統制カテゴリーと具体例および頻度

カテゴリー	具体例	頻度 (件)
就学前		
安全	危ないところで遊ばない／一人で外出しない	5
習慣	早寝早起きするように／食事時のマナーを守る／挨拶をするように	5
食事内容	食事を残さないように／好き嫌いをしない／おやつは15時だけ	4
衝動性の制御	品物に触れない／公共の場でうるさくしない	4
服装	服を汚さないように／母親好みの服装	2
(学業的) 勤勉さ	暇な時間を無駄にしない／(絵)本を良く読むようにとの働きかけ	3
役割の強調	妹をいじめない(主として姉の立場から)／きょうだいけんかをしない	2
メディア統制	漫画・ゲームは禁止／TVは見てほしくない	2
小学校		
習慣	行儀／歩き方／早寝早起き／私物や共有物の片づけ	21
安全/モニタリング	帰宅時間を守る／外出先は必ず親に報告	13
一般的動機づけ	自分が挑戦したいことはチャレンジしたほうが良い／皆と仲良くするように	13
学業的動機づけ	母親にテストの結果を見せる／テスト前に遊びに行かない	9
ジェンダー・役割の強調	男の子が使うような乱暴な言葉遣いをしない／姉らしくする	9
メディア統制	TV視聴時間／自宅でのTVゲーム禁止／携帯電話禁止	8
反抗に対する否定的反応	親の言いつけに対し不満や愚痴を言わない／口答えしない	7
道徳	弱い者いじめをしない／嘘をついてはいけない	4
手伝い	食事の手伝い／手伝いをするように	3
服装	きちんとした服装	2
中学校		
一般的動機づけ	ひとつのことをやり遂げるように／落ち着いて行動するように	9
安全/モニタリング	門限があった／友人だけで遠くへ遊びに行くのはだめ	8
反抗に対する否定的反応	親への口答え／生意気／かわいくない／口が悪い／態度が悪い	7
習慣	早寝／朝の支度を早くするように／座るときのマナー	4
学業的動機づけ	勉強は自分でやりなさい／100点以外はだめ	4
友人関係	友人／異性関係を咎められた	3
ジェンダー・役割の強調	乱暴な言葉遣いをしない／姉だから弟(妹)に譲ってあげるように	2
メディア統制	漫画、ゲーム／家庭でのTVゲーム禁止	2
服装	服装は厳しかった	2
高校		
安全/モニタリング	寄り道しないように／門限／外出先を親に連絡／誰と遊びに行くか告げること	10
一般的動機づけ	宿題や提出物をぎりぎりまで放っておくな／自分のことは自分で決めるように	9
メディア統制	メール・チャットをやりすぎないように／携帯電話をいじりすぎるな／TVゲーム禁止	5
学業的動機づけ	とにかく勉強しろ／成績をもっと上げるように／将来に向けて勉強すること	5
反抗に対する否定的反応	親への口答え／生意気／わがまま	3
習慣	就寝時間9時／早く寝るように	3
友人関係	男女交際より受験を優先させるように／友人宅に泊まるのは良くない	2
服装	きちんとした服装	2
大学以降		
安全/モニタリング	門限／一日一度は連絡するように／怪しいサークルに近づくな	12
ジェンダーの強調	女性らしく／言葉使い／髪の毛は長いほうが良い／日焼けはしないほうが良い	5
習慣	早く寝ること／食事をきちんと取ること／飲酒はしないように	4
金銭について	無駄使いしない／金銭的トラブルに巻き込まれないように	2
友人関係	恋人について	2
ファッション	髪の毛を染めない／ピアスはするな	2

注：各学齢期におけるカテゴリーは頻度の多い順に記載している

2. 幼少期から現在までの養育者からの統制に対する認知：

A4用紙1枚に、小さい頃から現在まで親から受けた統制について、箇条書きで記入するよう求めた。教示文は「これまでに、養育者から注意を受けたり、叱られたり、あるいは「このようにしたほうが(しないほうが)いいよ」など言われたこと、また、表立って言われなくても制限されていたと感じていたことを思いつくまに挙げてください。できれば、いつ頃だったか教えてください。」である。用紙には、小学校就学前、小学校、中学校、高校、高校卒業後と区切りが示され、もし、幼稚園から小学校の間続いたことであれば、矢印等でその期間がわかるよう書きいれてもらった。統制内容が記された記録用紙から意味内容のまとめりに1つずつ紙片に書き写し、KJ法によりカテゴリー化した。

結 果

統制認知の内容

未就学時から現在に至るまでの統制認知のカテゴリー、具体例および、全員のデータによる出現数を頻度の多い順に Table 3 に示した。

全体的傾向と学齢ごとの違い

面接者のほとんどが、“危ないところで遊ばない”、“門限を設ける”、“友人だけで遠出をしない”などの「安全」についての統制があったことを想起しており、就学前から大学卒業全ての期間にわたって報告頻度の上位に位置していた。小学校入学以前は単に遠くへ行かないといった制限であるが、活動の範囲が広がる小学生以降になると、外出先や誰と一緒に遊ぶことによる行動の把握、すなわち「モニタリング」が行われていた。

就学前に特徴的だった統制認知は、“食べ物を残さないように”、“食が細いのに無理やり食べさせられた”、といった「食事内容」と、“品物に触らないように”などの「衝動性の制御」であった。養育者からの教育的働きかけ（たとえば、“本を良く読むように”）は、就学前から報告されており、子どもに勉強させるよう促す「学業的動機づけ」に関する報告が最も多かったのは小学生時代であった。小学校時代で最も多く報告された項目は、早寝・早起き、行儀・マナー等の「習慣」に関する働きかけであり、中学、高校にかけてその頻度は減少している。続いて、「安全・モニタリング」、「一般的動機づけ」および「学業的動機づけ」の順に多かった。「一般的動機づけ」は、対人関係についての養育者からのアドバイス、自律を促す言葉かけ、勉強やクラブ活動への取り組みへの意欲を向上させるような言葉かけから成っている。必ずしも、子どもにとって肯定的な働きかけと認知されるものだけではなく、暗黙のプレッシャーと受け止められていた記述も含めた。このカテゴリーは小学校から高校時代を通して報告頻度が相対的に高かった。メディア使用については、年齢が低いときはテレビや漫画、デジタルゲームに関する統制が多く、中学校から高校にかけて携帯電話使用に対する統制が中心となっていた。

面接者が全員女性ということもあり、姉役割に関する統制認知が全般的に多く報告された。そのような統制に対し、“何故姉だからといって親代わりの仕事をしなければならないのか”あるいは“妹はあまり厳しくされなかった”のような否定的な感想がみられた。就学前から“きょうだいげんかをしない”、“いじめないように”といった報告はあったが、けんかは良くないといった一般的な統制というより、姉に対する働きかけと解釈されたため未就学時代には「役割」としてカテゴリー化した。小学生以降はさらに、“乱暴な言葉遣いはしない”、“女性らしくする”のようなジェンダー的な働きかけの頻度が増加した。

小学生中学生時代に増加したカテゴリーが、「反抗に対する否定的反応」である。具体的には、養育者からテレビのチャンネルを変えられる、養育者から何か頼まれ事をされた時に、不満そうな顔をすると、“口答えをしないように”と養育者から釘を刺されること、あるいは、養育者の言うことに従わないので“かわいくない”、“生意気だ”といった否定的なフィードバックが返ってくることであった。「反抗に対する否定的反応」は小学校からみられ中学校時代をピークに高校時代には頻度が少なくなった。異性の交遊を含む「友人関係」や「服装」に関する統制認知の報告は相対的に少なかった。統制に関する自由記述を完成させた後、面接者がある面接対象者に尋ねたところ、服装や友人に関する養育者の好みと自分の好みはたいていの場合似ているため食い違いが生じないと答えていた。家事などへの「手伝い」についても小学校時代にのみ報告され、中学高校時代には特に言及されなかった。

統制のカテゴリー数、頻度ともに小学生時代が最も多く、年齢が上がるにつれて種類も頻度も減少していた。高校卒業以降は、親元を離れて暮らしている面接対象者も多く（総数の70%）養育者との連絡を密に取るようにとの働きかけや自律的な生活をするうえでの注意点を伝えることがあげられた。親と同居の場合であっても、「安全」や「ジェンダーの強調」、「習慣」などの統制がみられた。

人口統計学変数による群分けと統制認知との関連

父母や祖父母世帯の職業が専門・管理職に偏っていたため、「父母職業（父親母親のいずれかが専門管理か否か）」、および「祖父母職業（祖父母のいずれかが専門管理か否か）」の2値変数を作成した。父母職業、祖父母

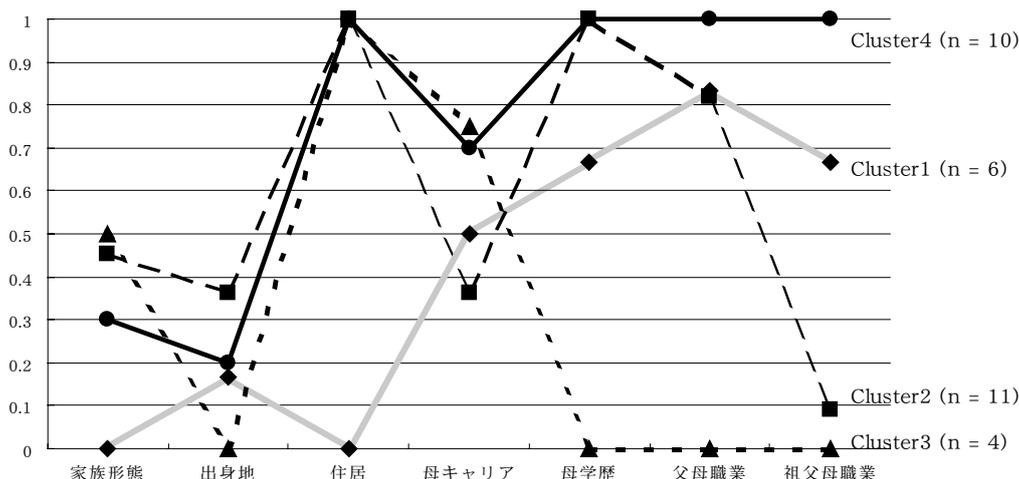


Figure 1 クラスタ分析によって得られた4群のプロフィール

職業、出身地、家族形態、住居、母親学歴、母親キャリアの変数を使用し、階層的クラスタ分析を行った。クラスタ間の距離の測定方法、すなわちクラスタ化には鎖効果の出にくいWard法を採用した。個体間の距離は平方ユークリッド距離で測定した。デンドログラムを目安に2から4までのクラスタ解を求め、分析で用いた変数の平均がクラスタ間で最も差の大きくなるように（林、2007）、4クラスタ解を選択した。各クラスタに含まれる個体数、各変数の平均値のプロフィールはFigure 1の通りである。

1元配置の分散分析の結果、中学時代の住居、母親学歴、父母職業、祖父母職業の4変数において4つの群の間に有意な差がみられた。住居について、クラスタ2、3、4は持家³ ($\chi^2(3) = 31.00, p < .01$)、母学歴について、群3が最も低く、次いでクラスタ1が高く、クラスタ2と4は高学歴のみであった ($F(3,27) = 23.66, p < .01; 3 < 1 < 2 = 4$)。父母職業では、クラスタ3が専門管理以外の職業、クラスタ4は専門管理 ($F(3,27) = 10.75, p < .01; 3 = 2 < 1 < 4$) に属していた。

祖父母世帯の職業では、クラスタ3と2が専門管理以外の職業、次いでクラスタ1の専門管理職の割合が高く、クラスタ4は全て専門管理職であった ($F(3,27) = 22.07, p < .01; 3 < 1 < 2 = 4$)。次に、この4群で、中学時代の生活満足度 ($M = 3.73, SD = 1.00$) および年齢に差が有るか調べたところ、生活満足度には差が無く、年齢の平均値には有意な差が見られた ($F(3,27) = 8.30, p < .01; 2 = 4 < 1 = 3$)。

以上の結果から、クラスタ1は、高年齢 ($M = 31.33$)・非持家・親世代専門管理職、クラスタ2は、低年齢 ($M = 21.49$)・持家・母高学歴・親世代専門管理職、クラスタ3は、高年齢 ($M = 30.71$)・持家・母低学歴・二世帯非専門管理職、クラスタ4は、低年齢 ($M = 21.78$)・持家・母高学歴・二世帯専門管理職の特徴を持つことがわかった。

最後に、「反抗に対する否定的反応」「安全/モニタリング」「動機づけ」「学業」「習慣」「友人関係」「ジェンダー・役割の強調」「メディア統制」「服装」の各カテゴリーにおいて、該当する報告が1回以上有れば1、無ければ0と2値コード化を行い、4つの群で統制カテゴリーに差がみられるか1元配置の分散分析を行った。平均値差を調べたところ、「反抗に対する否定的反応」のみで有意な差がみられ ($F(3,27) = 8.30, p < .01; 2 < 4$)、クラスタ4はクラスタ2に比べ親に対し口答えしないようにと報告した女子学生が多かった。

考 察

本研究の目的は、女子大学生が子ども時代に経験した養育者のしつけや統制の具体的内容やその推移を調べ、養育者がどのような社会化に向けた働きかけをしていると認知されているのか探るとともに、人口統計学上の変数による社会的地位の違いによってそれらの働きかけの内容に差異が生じるのか調べることであった。

自由記述による子ども期を通じた統制内容の報告を検討したところ、内容表現は異なっているが、ほぼ全員が、身近で生じうる事故や危険を回避するといった、「安全」に関する注意を幼い頃から青年期に至るまで受

けていた。行動の自律性が増す青年期からは、誰とどこへ行くのか尋ねるといった追跡や監視tracking and surveillance (Crouter, & Head, 2002)、すなわち「モニタリング」が加わり、養育者が不足する情報を得ようと積極的な介入を行っていると考えられる。Dishion & McMahon (1998) におけるモニタリングは、子どもの所在や活動、適応に注意を払い追跡することに関連する一連の親の行動と定義され、小さい子どもの安全・受傷や学童期から青年期にかけての反社会的行動、物質使用、学業達成に重要な役割を果たす、と構成概念としてより広義の意味を持つ。本研究の結果から、モニタリングは相対的に適応の良い大学生にも頻繁にみられる統制実践の1タイプであることがわかった。新しく注目される統制のひとつにメディア使用に対する統制 (Gentile & Walsh, 2002; 内海, 2010) がある。頻度は少ないが本研究でも幼少期から養育者からの介入があったと報告された。子どものメディア消費や使用と適応との関連だけではなく、特定のメディア使用に対する統制は、どのような親の信念と結び付いているのか、また子どもにとってどのような統制の領域と認知されているのか、あるいは発達に最適なメディア統制のタイプはあるのか調べる必要がある。

しつけとは、一般的に行儀作法のような習慣的行動を身につけさせる行動や働きかけを意味していると考えられる。具体的で文脈が限られている習慣に関連する統制は、小学生時代で最も頻繁に想起され、年齢が上がるにつれて少なくなっていた。それとは対照的に、抽象的な意味内容を持つ親の信念や価値観、考え方を示すといった動機づけの頻度が上昇したことは、子どもの認知発達や身辺自立の進み具合に合わせ親は統制方略を変化させている可能性がある。社会経済的地位以外にも、養育者の信念や行動は子どもの動機づけに影響を及ぼす重要な要因 (Wigfield, Eccles, Schiefele, Roeser, & Davis-Kean, 2006) である。養育者の信念や価値観が子どもにどのように認知され、子どもの発達や適応に関連するか調べることは、教育的臨床的な議論のうえでも興味深いテーマとなるだろう。

個人の同一性に関わる服装や友人の選択に対する統制は、プライバシー・ゾーンへの侵入とみなされ小さな子どもであっても否定的な感情を伴って受け止められる (Lagattuta, Nucci, & Nucci, 2010) といわれている。本研究では、プライベート領域における統制の報告は子ども期を通して少なかった。この解釈には、子どもと親の選好が同じであったため葛藤が生じず報告されなかったという理由と、選好が違っていても親は子どもの自律を認めていたため葛藤そのものが生じなかったとの2つの可能性がある。また、同一性に関連しかつ否定的に捉えられた統制として、女性らしさや姉役割に対する働きかけが報告された。もし、男性の場合、言葉づかいをたしなめられることは女性同様に生じるのであろうか、また、兄役割を強調されることに否定的な反応は付随するのだろうか。これらの問題については、性別変え人数を増やしたサンプルで詳しく調べる必要があるだろう。

社会的地位を考慮した群分けでは、ほとんどの統制カテゴリーに頻度の差はみられなかった。出身家族の背景にかかわらず、本研究のサンプルが認知した統制のパターンはだいたい似通っていた。唯一確認されたのは、親世代と祖父母世代がともに専門管理職である群は親世代だけが専門管理職よりも親に対して反抗的な態度を取ったことについて、親から否定的な反応を認知する頻度が高かったことである。Lareau (2003) における高学歴ミドルクラス出身の子どもの特徴は、幼いころから才能を査定し積極的に伸ばすような計画的子育てを受け、大人に対する言語の使用も論理的で、異議申し立てや葛藤解決にあたって交渉的な話し方をするのであった。しかし、杉村・竹尾・山崎 (2007) では、日本の大学生は親子の葛藤解決をする場合、理想的にはネゴシエーションを挙げるが現実にはほとんど行われていないことが指摘されている。東 (1994) でも、親が説明なしに頭ごなしに命令して言うことを聞かせようとする権威的・制限コードの頻度の多さは、子どもの知的発達と負ではなく正の相関がみられたとして日本と欧米との発話形式と伝えられたメッセージの内容が異なるのではないかと推論している。本研究の結果は、知的能力や学力の高さおよびその再生産と親子間の民主性自律性の度合いとの関連が欧米とは異なっていることを示しているのかもしれない。

これまで、親子の間で社会化に向けられた実践が日常的に行われ子どもにどのように認知されているのか、あるいは、それらの統制認知に発達のな変化や文脈的影響がみられるのかについては取り上げられることは少なかった。養育者は、子どもの身辺自立や精神的な自律の進み具合により、統制を行う領域や行使する方法を変えるかもしれないし、逆に、領域によっては一貫性がみられるかもしれない。あるいは、きょうだいによって異なった対応を取るかもしれないし場面や文脈により違った統制方法を取るかもしれない (Harris, 1998)。さらに、子どもが認知する統制は、養育者が意図した統制とは異なっているかもしれない。たとえば、養育者が年長者の

要求は必ず実行すべきという信念を受け継ぎ、それを子どもに伝えようと行使している要求性であっても、近代的自我を持った子どもは自己の自律性が損なわれたと否定的に受け止めることもありうる。

本研究では、自由記述による回顧報告のみを取り上げた。全員に同じ質問を行わなかったことで報告された統制の内容や頻度に歪みがありうる。また、子どもの統制認知は実際に行われた養育者の統制行動と厳密には解釈することはできないかもしれない。しかし、その認知には、意味内容の類似性や一定の組織的な変化がみられ、子どもにどのように統制が認知されたか調べる意義はある。また、本研究の結果は、面接対象者の人数が少なく女性に限られており、かつ定位家族の社会的地位が偏っていたことに一般化可能性の限界があるが、年齢や性別、出身地、社会的地位を変えた量的調査を行うことで、日本における養育者の統制の複雑性や文化文脈を越えた普遍性に関する知見が得られると考えられる。

注

- 1 日本の教育社会学や教育心理学では、子ども（特に乳幼児期から児童期に至る）に対する親の行動や態度を意味する言葉として、「しつけ (discipline)」や「子育て (child-rearing)」のほうが一般的に使用されているため、欧米の社会化研究で用いられる「養育 (parenting)」は馴染みが薄いかもしれない。「養育 (parenting)」は青年期・成人期早期の子どもの家庭を含む概念である。本研究では、混乱を避けるため、文献上の「しつけ」は統制、「子育て」は養育として引用した。
- 2 「階級」が、階級間の移動を前提としないのに対して「階層」は「階層間」の移動を前提とする（盛山、2000）。「階層」とは、社会的資源や経済的資源等により、所属する層間に不平等がみられることを意味する。たとえば西欧における労働者階層と中産階層は主として経済的資源の差に焦点を当てたカテゴリー分けである。引用文献ではこの使い分けがされているわけではないため、本研究では「階層」と統一して表記する。マルクス主義における労働者階級と資本家階級とは生産手段所有の有無で区別されたが、その間に中産階級（小規模自営業）がカテゴリー化されている。社会学ではこの比較的小規模な生産手段を持つ中間層を旧中間層、事務・サービス・販売関係業務に従事するホワイトカラー層を新中間層と定義している。Bernstein (1971) やLareau (2003) の中産階層は新旧の区別をしておらず、労働者階層との区別において学歴差を仮定して議論している。
- 3 1群と2、3、4群が完全に0と1に分かれたことによりF値が計算できなかったため χ^2 値を算出した。

引用文献

- 東 洋・柏木恵子・R. D. ヘス. (1981). 母親の態度・行動と子どもの知的発達：日米比較研究 東京大学出版会.
- 東 洋. (1994). 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会.
- Barber, B. K. (1997). Adolescent socialization in context: The role of connection, regulation, and autonomy in the family. *Journal of Adolescent Research, 12*, 5-11.
- Baumrind, D. (1991). Parenting styles and adolescent development. In I. Brooks-Gunn, R. Lerner, & A. G. Petersen (Eds.), *The encyclopedia on adolescence* (pp. 746-758). New York: Garland.
- Bernstein, B. (1971). *Class, Codes and control, Vol 1: Theoretical studies towards a sociology of language*, Boston: Routledge & Kegan Paul. 萩原元昭（編訳）言語社会学論 明治図書.
- Bronfenbrenner, Urie (1979). *The Ecology of Human Development*. Harvard University Press (磯貝芳郎・福富護訳(1996). 人間発達の生態学 川島書店).
- Crouter, A. C., & Head, M. R. (2002). Parental monitoring and knowledge of children. In M. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting* (2nd ed., pp. 461-483). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Darling, N., & Steinberg, L. (1993). Parenting style as context: An integrative model. *Psychological Bulletin, 113*, 487-496.
- Dishion, T. J., & McMahon, R. J. (1998). Parental monitoring and the prevention of child and adolescent problem behavior: A conceptual and empirical formulation. *Clinical Child and Family Psychology Review, 1*, 61-75.
- Erikson, R., Goldthorpe, J. H., & Portocarero, L. (1982). Social fluidity in industrial nations: England, France and Sweden. *British Journal of Sociology, 33*, 1-34.
- Gentile, D. A., & Walsh, D., A. (2002). A normative study of family media habits. *Applied Developmental Psychology, 23*, 157-78.
- Harris, J. (1998). *The nature assumption*. New York: Free Press.
- 林雄亮 (2007). 第13章クラスター分析 村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士 共編 SPSSによる多変量解析 オーム社.
- 広田照幸 (1999). 日本人のしつけは衰退したか：「教育する家族」のゆくえ 講談社現代新書.

- Kerr, M., Stattin, H., Biesecker, G., & Ferrer-Wreder, L. (2003). Relationships with parents and peers in adolescence. In R.M. Lerner, M.A. Easterbrooks, J. Mistry (Eds.), *Handbook of psychology: Developmental psychology*, vol. 6. (pp. 395-419). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Lagattuta, K. H., Nucci, L., & Bosacki, S. L. (2010). Bridging theory of mind and the personal domain: Children's reasoning about resistance to parental control, *Child Development*, 81, 616-635.
- Lareau, A. (2003). *Unequal childhoods: Class, race, and family life*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Maccoby, E. E. (1992). The role of parents in the socialization of children: An historical overview. *Developmental Psychology*, 28, 1006-1017.
- Maccoby, E., & Martin, J. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.), P. H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 4. Socialization, personality, and social development* (pp. 1-101). New York: Wiley.
- 内閣府 (2009). 男女共同参画白書.
- 盛山和夫 (2000). ジェンダーと階層の歴史と論理 盛山和夫編 日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族 東京大学出版会 pp. 3-26.
- 白波瀬佐和子 (2005). 少子高齢社会のみえない格差 東京出版会.
- 杉村和美・竹尾和子・山崎瑞紀 (2007). 青年一両親観の葛藤調整過程に関する面接調査 *Human Developmental Research, Coder Annual Report*, 21, 39-54.
- 内海しよか (2010). 中学生のネットいじめ, いじめられ体験: 親の統制に対する子どもの認知, および関係性攻撃との関連 教育心理学研究, 58, 12-22.
- Wigfield, A., Eccles, J. S., Schiefele, U. Roeser, R. W., & Davis-Kean, P. (2006). Development of achievement motivation. In Eisenberg, N., Damon, W. & Lerner, R. (Eds.) *Handbook of Child Psychology (6th ed.)*, Vol. 3 (pp. 933-1002). Hoboken, NJ: Wiley.
- Youniss, J., & Smollar, J. (1985). *Adolescent relations with mothers, fathers, and friends*. Chicago: University of Chicago Press.